

## 私の誇り

しばた あんじゅ  
柴田 杏樹

パパじゃなくてママがいいと、思えば私はパパイヤ期が長かったような気がする。私が幼い頃から父は海外出張で、父不在の日が多かった。たまに会うとヒゲが当たって痛いのお構いなしに頬ずりしてきたり、寝ているのに「パパが帰りましたよ」と言っただけで起きられたり、嫌だと拒絶してもしつこく愛情表現をしてくるので、「一メートル以内に入らないで」と怒りながら逃げていた。

私が小学校に上がる頃には、パパイヤ期は解消したが、相変わらず父は多忙を極めていた。海外とのやりとりは時差があるため休みの日や夜遅くに電話がかかってきたり、朝早くからパソコンに向かい仕事をしていることが多かった。リビングでくつろいでいる時も、私に地球儀を見せながら出張先の気候や文化の事などを教えてくれたり、父は出張や海外での仕事を楽しんで仕方ないのだと思っていた。激務なのに楽しいから頑張れるのだと私は解釈していた。そして私が三年生の時、父はロンドンに単身赴任になり離れ離れの生活になったが、テレビ電話やラインなどの文明の利器が、物理的・時間的距離を越え、父と私達をつないでくれた。

夏休みに私と母で単身赴任先に会いに行くと、大きな冷蔵庫に私の好きな食べ物があった。「好きなもののリスト」というメモが貼ってあり、冷蔵庫の中にはそれらがたくさん詰め込まれていた。私は嬉しかったが、照れもあり、どう言葉に表せ

ば良いかわからず、「パパはデータ好きだね、さすが分析屋」と茶化すと、  
「そうだな、これが本業。パパの仕事は赤ちゃんとママの笑顔を作るからだからな。幸せだよ、生きがいだ。」  
とこともなげに言った。

今まで近くて遠く感じていた父。父の本心を知り、私の心に引つかかっていたわだかまりが洗い流され、愛情シャワーを一身に浴びながら幸せをかみしめた。父が頑張れる理由は他にもない私達のためだった。今までも精一杯の愛情で私達の幸せを願ひたすら働き、今も異国の地で一人で仕事に全力で向き合っていたのだ。心の片隅にあったモノクロの記憶が鮮やかなカラーで一気に蘇ってきた。私の成長に合わせて棚の位置が変えられる本棚を作ってくれたこと、計算が苦手だった私のために出勤前に計算問題を書いておいてくれたこと、料理をしたことがないのに私の好物のパンケーキを作ってくれたこと、運動会にロンドンから〇泊三日、二十時間滞在で来てくれたこと、父を父のフィルターを通して見てみたら、私達への愛情は計り知れないほど大きく深いものだった。

その日の夜は久しぶりに川の字で寝た。父と母の間で二人の体温を感じながら、寝息を立てている父の働く背中に向けてありがとうと書いた。